

Title	母-娘関係が語ること : ジョルジュ・サンドの小説作品を通して
Author(s)	高岡, 尚子
Citation	Gallia. 48 P.31-P.40
Issue Date	2008-03-07
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/5489">http://hdl.handle.net/11094/5489</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 母－娘関係が語ること

### —— ジョルジュ・サンドの小説作品を通して ——

高岡尚子

1970年から80年代にかけて、ジュリア・クリステヴァやリュース・イリガライといったフランスの思想家たちは、後にエクリチュール・フェミニンと名付けられる独自の女性表現の可能性を模索していた。その中で、結果的に共通の中心テーマとして浮き彫りになったのが、母－娘関係であったことは興味深い事実である。このことによって、「想像的なノスタルジアの世界に追放されるか、類型的な行動様式で説明されるか、解放の旗印のもとに見捨てられる母－娘関係<sup>1)</sup>」に対し、スポットライトが直にあてられることとなったからである。では実際に何が見出され、何に対する考察が可能になったか。ひとつには、それまでは男児の成長過程における機能のみが関心の対象であった母子という関係性に疑問符が付されたことがあげられる。精神分析の領域において特に重要視された親子という関係性は、男児とその父・その母においてのみ問題になったのであって、男児がいかに男児となり、いかに男（＝人間）となるかという過程を説明するのに一役を買った。だがこの説明からは、女兒が母と結ぶ可能性のある関係性は完全に抜け落ちているか、かなりの確率で意図的に無視されることになる。その意味で、エクリチュール・フェミニンが独自性を発揮する場所として、母－娘の中に存在するであろう愛・憎・痛み・反発・寄り添いといったさまざまな感情の交錯に留意したことは、当然であったと言えるだろう。

本稿では、親子、あるいは母子関係が重要視され始めた時期と背景を明らかにしたうえで、自身が母かつ娘として生きたジョルジュ・サンドの小説作品の中から、特徴的な母－娘モデルを抽出してみたい。そのことにより、父－息子関係と非対称的に抑圧された結果としての母－娘関係を、作家がどのように提示したか、また、解放の可能性を示せたとしたらどのような形であったかを検証する。

#### Ⅰ. 「母対息子」と「母対娘」の非対称性

フィリップ・アリエスが*L'Enfant et la Vie familiale sous l'Ancien Régime*において指摘したように、「小さな大人」としてではない独自の「子ども」という存在が認識され、親子・母子関係に注目が集まり始めたのは、そう昔のことではない。特に母親が、産むという行為にとどまらず、子どもを慈しむべき存在として自らの手で育てることに従事し、しかもそれが社会的に奨励されるようになったのは、

1) 竹村和子『愛について－アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店、2002年、155頁。

ルソーの *Emile, ou de l'Education* の影響によるところが大きいとされる。この中でルソーはそれまで通例化されていた育児・保育の方法に異議を申し立て、立派な男性市民を育てるための新しい教育法を打ち立てたのであり、その方法論は18世紀から19世紀にかけてのフランスで大いに広まるところとなった。結果、それまでは産むこと、あるいは育てることによって敬われることなどなかった中産階級の女性たちが、この仕事に自己の存在意義を反映させることになったのは驚くべきことではないだろう。新たに生み出された母親像は、新しい観念である母性本能・母性愛を導き、それまで流通していた、子どもを過度に世話することは好ましくないという言説を覆していくことになる。こうして女性たちは、新しい母親像を受け入れることを時には積極的に、時にはやむを得ず引き受けることになった。バダンテールはそれを「このように、まったく新しい生き方が18世紀末にあらわれ、19世紀を通じて発展していく。近代家族は、『内部』、すなわち家族の愛情の群を温かく保つ『家の中』のほうへと傾斜し、これまで一度としてあたえられなかったような重要な地位を得た母親を中心に据え、そのまわりに固まった<sup>2)</sup>と説明する。

しかしこの事実は、母親の地位を一方向的に向上させたということの意味するわけではない。母性や育児行為の価値が上がると同時に、18世紀末から、母親に異常なほどの負荷がかかり始めたというのは事実であり、家庭内での子どもにまつわる全てのことが母親の責任とみなされ、それを果たせない場合には社会的に制裁が加えられるようにすらなる。その上、母親には子どもの全てを決定する権利と自由裁量が与えられていたわけではなく、母親はさまざまな責任を負う一方で、決定権を持たず、逆に、父親には全ての権利と決定の自由が与えられていたにもかかわらず、家庭のことは口を出さないように、という非常に逆説的な現象が強いられていたのである<sup>3)</sup>。また、女親・男親の役割にはこのような分担があったとの指摘もある。

Enfin, le père intervient de façon décisive dans le processus d'identification sexuelle tel que Martin souhaite qu'il s'accomplisse, en offrant l'image référentielle d'une virilité accomplie et dominante. Pour les filles, qui grandissent dans un univers féminin quasi unisexué, la figure du père est fondamentale pour les aider à apprendre comment la différenciation sexuelle se double nécessairement d'un partage des rôles sociaux : [...] <sup>4)</sup>.

2) エリザベート・バダンテール『母性という神話』鈴木晶訳、ちくま学芸文庫、1998年（原著は1980年）、260頁。

3) S'il est acquis que c'est à la mère de s'occuper des enfants quand ils sont petits, le père doit, non s'en désintéresser, mais savoir se tenir à une juste distance d'une charge domestique jugée mineure en regard de son activité salariée, qui nourrit la famille.[...] (Gabrielle Houbre, *Histoire des Mères et Filles*, Editions de la Martinière, 2006, p.40.)

4) *Ibid.*, p.40.

ここでHoubreが例に挙げているマルタンとはルイ＝エメ・マルタン（『家庭の母の教育について』の著者）であるが、そのモデルに従えば、父親は子どもが性自認を持つ段階にいたって決定的な介入をする必要があり、それは完全で支配的な男性性のモデルとしての自己を誇示するため、ということになる。そして、その誇示の方法は、子どもが男の子であるか女の子であるかによって異なり、男児に対しては、自身がその象徴であるところの、支配・権威・男性性を継ぐものとしての自覚を持たせること。一方、女児に対しては逆に、社会には支配・被支配の関係があって、性役割に反映していること、そして、彼女は被支配の側にいるのだということ教え込ませることになるのである。

幼児が成長し性自認を持ち、社会化されていく時期、つまりはフロイトの言うエディプス期に父親からの絶対的な介入がなされることにより、母－娘関係にどのような影響が現れるだろうか。いわゆる前エディプス期における母親との関係は、相手が娘か息子かによって大きく異なることはない。母親は全存在的な愛情と献身を子どもに与えるべきとされ、子どもたちが一様にそれを受け取ることによって、母子の一体化したやわらかな関係幻想が果たされることになる。しかし、一旦その時期が来れば、息子は父親が表象する世界＝公＝外へと導き出され、一方、娘はその場が彼女のものではないことを教えられ、外へと導き出されるのではなく、母親の元に留まり、将来は母親のようになることを求められるということになる。ここに子どもの社会化＝ジェンダー化が起こっているのは明らかであり、男児と女児の非対称性は疑いようがない。男児には父の権威が与えられ、外の世界の優等性が保証されているため、母親との別離に折合いはつきやすい。しかも、母と同じような娘をもらい、妻に母の代りになってもらうという期待が残される。一方で、女児には父親への同化が許されず、外側の世界に出る可能性が閉ざされるだけでなく、当の父親によって性差と社会役割の一体化が説かれ、男性の優位と女性の劣等を教えられるのである。このことによって、それまで全的な存在として敬い恋慕してきた母の役割が、実は、父のそれに比べれば価値のないものだという認識を突きつけられ、しかも、娘はその役割を負うことをも要求される。これは女児にとっては二重の痛手であり、男児と同じような回復の道を探ることも不可能である。息子は大きくなって、母の代りを他人に求めることができるが、娘にはそれができない。自分が母になるしかないのである。

加えて女性は結婚をさかいにし前には「処女」、後には「母」というあり方が求められる。それはすなわち「妻として生きる」とか「女として生きる」というオプションはないということであって、人間個人として生きるということももちろん問題外である。そうした状況を考えれば、「母－娘」関係は女であることの負のおりが沈殿する場所とはなるが、それを解消しようとして現れるほころびが、課されるのではない女性存在の可能性を開くことにもなるだろう。先に述べたエクリチュール・フェミニンの論客たちは、まさにこの母－娘断絶の時期を回避し再評価したのだったし、18世紀後半以降、こうしたほころびが存在したことを多くの文学作品が語ってくれる。ここからは、「差し出す母」「阻む母」「名誉回復を

果たす母」をキーワードに、19世紀前半から中盤にかけてジョルジュ・サンドが作品に描いた母－娘関係を類型化し、そこに示された母子関係の現実を検証していきたい。

## Ⅱ. 「差し出す母」

この時代に求められていた理想の母親像は、しばしば「家庭の中の天使」と表現される。完全な純潔を保った処女が、結婚をさかいに一夜にして母となり、夫と子に全てを捧げ、父－息子関係をスムーズに取り結ぶ役割を果たす人。それが「家庭の中の天使」である。特に50年代までの作品に顕著であるが、サンドの作品にこの種の母親が現れることは稀である。その理由としてひとつ考えられるのは、作家がこうした母親を理想とみなしていなかったということがある。サンドにとってこのような母は抑圧された女性の典型であって、逆に忌避されるべきものと映ったのであろう。であるならば、サンドが描いた母－娘関係とはどのようなものか。

本稿では三つのタイプの母－娘関係を提示するが、そのうちの二つにおいては明らかに、母・娘双方に、いびつな形での圧力がかかっている。その結果、特に母親側に顕著な反応が現れるのだが、それは母が娘を切り離す（あるいは切り離さない）瞬間においてである。母は常に娘を手元に置ける、あるいは置きたいと思うかといえばそうではない。つまり、家内で純粋培養された処女＝娘から一足飛びに妻＝母へと変更されることで社会の中に組み込まれる当時の女性のあり方において、母の役割として娘を配偶者の手に委ねることが期待されているからである。もちろん、法的あるいは経済的決定権がないため、配偶者の選択や結婚期そのものを母ひとりが決められるわけではない。しかし、女としての社会的機能を世代から世代へと継承し、再生産するという意味において、母によるその配偶者への娘の引渡しは、比喩的な面でも非常に重要な行為だと言える。

母親の類型のうちひとつ目は、「差し出す母」である。「差し出す」相手は無論、配偶者としての男であるが、このカテゴリに含みこまれる母親は闇雲に、あるいはある種の悪意を持って娘を送り出す。典型的な例は *Valentine* における *comtesse de Raimbault* であるが、裕福な商人の娘であった旧姓 *mademoiselle Chignon* は「幼い頃から栄華に強く憧れ」ていたのであり、自身的美貌と優雅な立ち居振る舞い、策略に長けた機知ととりわけ «ambition» の強さに裏付けられて社会の階段を上り詰めることを誓う。彼女にとって、継子である Louise も、実の娘である Valentine も愛情の対象ではなく、「ambition」が実現されるためであれば手段となり、逆にその妨げとなるのであれば邪魔者として立ち現れるのである<sup>5)</sup>。Eliacheff と Heinich は *Mères-Filles : Une Relation à trois* において、母親のあり方を大きく二つに分け「女よりも母」、「母よりも女」とし、前者を「母であること」に全霊を傾けることでアイデンティティの確立を果たすあり方、後者を母親としての任務で

5) George Sand, *Valentine*, Grenoble, Editions Glénat, 1995, p.82.

はなく、女性としての自己に価値を見出すあり方と位置付けている<sup>6)</sup>。Valentineの母はこの分類によれば、「母よりも女」型に入るだろう。彼女は comte de Raimbault の後妻に入った当初、わずかに10歳であった Louise に強烈な嫉妬を覚え、その様子は «madame de Raimbault devint sa belle-mère, et comprit avec effroi qu'avant cinq ans la fille de son mari serait pour elle une rivale<sup>7)</sup>» と描写される。この嫉妬心は、娘を夫と分け合うことに端を発するものではなく、むしろ、女としての野心の妨げとして継子を見ていることが理解されるだろう。事実、彼女は自身の愛人が Louise に言い寄り、未婚のまま身ごもるという事態を目の当たりにすることで不安が的中するのを見るのだが、その結果、彼女の «haine implacable» は Louise を «la terre d'exil et de misère» まで追い詰めても飽き足らず、存在を抹殺しようとまでするのである<sup>8)</sup>。ここにはもちろん、愛人を略奪され煮え湯を飲まされた女の怨念と嫉妬の爆発を見ることが可能であるが、この執拗なまでの嫌悪にはそれ以外の原因もあろう。未婚にして身ごもった娘という恥辱に立ち向かうため、Louise の父は男に決闘を申し入れて殺害し、自身もまた、死に場所を求めるかのように戦場に赴き、帰らぬ人となる。これを comtesse の側から見れば、継子を身ごもらせた自分の愛人を、夫に殺されたことになる。夫が男と決闘したのは、自分をめぐるのではなく、恥辱を受けた娘の名誉のためであることが、彼女にどのような作用を及ぼしたと考えればよいだろうか。「母より女」型の女性であり、ましてや実子ではなく継子相手のこととなれば、ライヴァルである娘に恋人を盗られただけではなく、夫をも奪われた彼女にとって、Louise に対する嫌悪は自身のアイデンティティ破壊への罰であると同時に野心の妨げとなるものの排除、さらには自身と娘を秤にかけて娘を選んだ夫への復讐とも読めるだろうか。

母の嫉妬と嫌悪は、継子にとどまらず、実の娘 Valentine にも及ぶ。ボナバルト時代、社交界の花であった comtesse は、その後凋落の一途を辿る。その彼女にとって娘は «un continuel sujet de retour vers le passé et de haine vers le temps présent» であり、娘を社交の場に出さざるを得なくなった時には «lorsqu'elle pouvait se montrer sans Valentine, elle se sentait moins malheureuse» と感じるのである<sup>9)</sup>。ここには同じ女としての嫉妬と、満たされなかった «ambition» への哀惜を読み取ることができる。そして彼女は Valentine を早々と Lansac に嫁がせることを決めるのだが、ここで目的とされているのはもちろん娘の幸福ではない。復古王政時代、権勢を取り戻していた旧時代の貴族に連なる Lansac は、この時点で彼女に大きな利をもたらすことを約束してくれるというただその一点においてのみ、婿としての資格を認めたのである。

このようにして comtesse は自身の野心のために娘を差し出してはばからない

6) Caroline Eliacheff et Nathalie Heinich, *Mères-Filles : Une Relation à trois*, Albin Michel, 2002. 邦訳「だから母と娘は難しい」、夏目幸子訳、白水社、2005年。

7) *Valentine*, p.82.

8) *Ibid.*, p.50.

9) *Ibid.*, p.84.

が、これと全く同じ構造を *Jacques* における *Fernande* とその母に見ることが出来る。物語の冒頭で宣言される *Fernande* と *Jacques* の結婚の経緯は、彼女の母の «ambition» の結果であり、求められているものは «riche alliance» であると明言される。この母は *Jacques* によって «méchante femme» と表現され、彼はこの母親の手から娘を救い、彼女が求めるのとは別次元の幸福を与えようと決心する。いづれにしても、こうした母親は娘ではなく自分自身の欲望が実現されることを望んでいるのであり、そのことによって娘の意志が疎外されるように描かれているのは事実であろう。この二人の母親に共通しているのは、夫が既に亡くなっているという点である。彼女たちは夫に代わり、最大限の権力を娘の上に振るおうとし、娘はその前に知らずに屈服するしか方法がない。このことは一見、家父長システムにおける家長の権威を横取りし、それによってエゴイスティックな満足感を果たしているように見えるが、これはあくまでも仮の姿でしかなく、果たされるか否かの決定権はさらに先延ばしされ、娘の夫に委ねられてしまうという結末を持つ<sup>10)</sup>。こうした母は犠牲者としての自己を娘に転化するという意味では横暴であるが、一方で、そうした対し方でしかシステムに反逆するきっかけを持ち得ない存在でもあるのだと言えよう。

### Ⅲ. 「阻む母」

「差し出す母」は娘を配偶者という外の世界に向かって押しやるが、それは決して娘の自立を促してのことではない。かつて娘であった母親が自分の娘に向かい、娘=処女から妻=母へのお膳立てをするとき、「女になること」を促すか邪魔するか、関与しないか、そのいずれかによって娘の将来はかなりの影響を受けるだろう。「差し出す母」にとって娘が「女になること」はライヴァルの誕生であり、その嫌悪感と嫉妬は、利益のために娘を利用することによって得られる勝利の意識によってのみ賈うことが可能になる。その際、行きがかり上、母は娘の女への過程を促すことにはなるが、自身が経験せざるを得なかった女という不幸から娘を遠ざける形ではなく、むしろ積極的に娘の目に覆いをし、異性ととの空間の中に無防備なまま投げ出す。こうすることによって得られる、ある種サディスティックな悦びが、「母より女」を選ぶ生き方を特徴づけているとも言えよう。

一方で、娘が「女になること」を徹底して邪魔する母親がいる。これを二つ目の類型として「阻む母」と名付けておく。この種の母は、娘の自立を一見促しているように見えて邪魔をする。このカテゴリに属する母-娘関係のうち、サンドが描いたものにはいくつかのヴァリエーションが存在する。ひとつは、*Leone Leoni* の女性主人公 *Juliette* の場合である。彼女はブリュッセルの富裕な宝石商のひとり娘であり、母は夫の財と自らの美貌を武器に、社交生活を満喫している。

10) カプランは「子に支配力を行使することの快感に酔いしれる母親」を「ファリックな母」と呼び、この種の母親は「夫への従属身分のはけ口をわが子に当り散らす。子どもとの干渉作用では、母親は父なる法と同化するが、すると今度は子が母親から『奴隷』の地位を譲り受けるハメになる」と述べる。(E.A.カプラン『母性を読む-メロドラマと大衆文化にみる母親像』水口紀勢子訳、勁草書房、2000年、51-52頁。)

母親の性格は «bonne, sincère et pleine de qualités aimables ; mais elle était naturellement légère» と描写され、その美貌は«prolongeait sa jeunesse aux dépens de mon [de Juliette] éducation» と説明される<sup>11)</sup>。そして、彼女は自分と同じくらい美しいJulietteを飾り立て、パーティに連れ歩くことに強い満足と喜びを感じている。つまり、彼女はFernandeの母のような«méchante femme»ではなく、娘をだしに使って利益を得ようなどとはしない（得る必要はないのである）。実際、Leoneを婿として見初める際にも、彼の財産には関心はなく、最も重要なものは«la tenue et les manières»だと説明されるのである<sup>12)</sup>。ではこの母-娘関係において何が問題なのかと言えば、それは、母による娘の取り込み、あるいは一体化である。母は娘を磨きたてるが、それは自身のクローンを造るような方法であって、本当に娘に与えるべき«éducation»は捨て置かれたままである。こうして母は愛玩動物のように育てた娘を、見栄えが良いだけの詐欺師Leoneにやってしまう。Julietteによれば«Ma pauvre mère ne s'apercevait pas qu'elle était elle-même bien plus enfant que moi<sup>13)</sup> .»であり、自身との分離を促進しないことによって娘の成長と自立を阻み、閉ざされた世界の価値観にしか触れさせようとしないのである。

もうひとつのケースは、中篇小説*Pauline*の中のPaulineとその母親の関係である。田舎の小都市のブルジョワに嫁ぎ、寡婦となったこの母は視力を失っており、ひとり娘のPaulineに世話を任せている。視力を失って後、交際を求めなくなった町の人々に対する恨みと、自由が利かない身体になったことへの不満は娘へと向かい、気難しさにおいてはその激しさはただ事ではない。母はどんな時間にも娘を呼び出しては世話を求める。娘はそれに応えるためにのみ存在し、彼女が生きる空間はかつて、そしてこれからも母とともに閉じ込められた古臭い家であろうと思われ、彼女から生命力を奪い去るようである。だが、この犠牲は一方通行のものであろうか。かつてPaulineの友人であり、現在はバリで名を上げた女優であるLaurenceは、この母-娘関係を見てこのように考える。

On eût dit qu'à travers cet admirable sacrifice de tous les instants, Pauline laissait percer malgré elle un muet mais éternel reproche, que sa mère comprenait fort bien et redoutait affreusement<sup>14)</sup> .

つまり、この母-娘は相互に依存しあっているのであり、その性質は一方が徹底的な犠牲を求め、もう一方が甘んじて受けることによって強い恨みに換えるというものである。こうすることにより、二人はお互いの言いわけとして機能し、どちらも自立をする必要がなくなるのである。当然の成り行きではあるが、この母は娘を性ある女として独り立ちさせることを阻む。事実、Paulineは一度結婚を考えるのだが、明らかにされない理由によって破談となる。これについてPaulineは

11) George Sand, *Leone Leoni*, Presses de la Cité, Collection Omnibus, 1991, p.726.

12) *Ibid.*, p.728.

13) *Ibid.*, p.729.

14) George Sand, *Pauline*, Editions des Femmes, 1986, pp.351-2.



結婚していたら後に視力を失った母の世話ができなくなっていたから、これで良かったのだと語るが、ここで阻まれているものは明らかであろう。母は自らの身体的不利を理由に娘を手放さず、彼女の性を支配し続け、「女になること」が禁止事項となることによって、二人の依存関係は保持されるのである<sup>15)</sup>。

JulietteやPaulineとその母親のような関係を、EliacheffとHeinichは«l'inceste platonique»と名付け、「De mère à fille, l'instauration d'une relation de type incestueux est facilitée par le fait d'être du même sexe : l'une devenant le miroir de l'autre, l'autre la projection narcissique de l'une, en un lien favorisant la confusion identitaire au détriment d'une réciprocité du lien.»と解説する<sup>16)</sup>。ここでとりあげた二人の母は、一見全く異なった対応をしているように思われるかもしれないが、この性質によって同じ「阻む母」に分類されると言えるだろう。また、EliacheffとHeinichはこのような関係に陥りやすい母を「女より母」に多く見出せると指摘するが、このことによって娘が受ける最大の被害は、対男性という異性愛世界への導入が極端な形で疎外されるという点である。いずれも男性に自己形成の目標を見出すJulietteとPaulineはいずれも、彼女らを人間とも思わない軽薄な男に裏切られることになるが、その原因のひとつは、母-娘関係に固定されざるを得なかった閉塞感だと言える。

#### IV. 「名誉回復を果たす母」

ここまでサンド作品に見られる、負の価値を背おうことでしか実現されなかった母-娘関係の二型を検証してきた。実際、サンドが出版した数多い作品を検証してみれば、円満な形で関係が結ばれ、それが次代へと継承、あるいは発展した形で提示された女性間関係の例は限られていることがわかる。このことは、冒頭に述べたような母-娘関係の軽視と、対母という次元における娘・息子関係の非対称性を考慮に入れれば、理解しがたいほどのことではないのかもしれない<sup>17)</sup>。しかし、このようにして描いたからこそその功もあり、負の圧力が渦巻く母-娘関係を詳らかにすることは、解決されるべき課題の提示を意味すると考えられる。また一方で、サンドは非対称的抑圧からの解放が、全く不可能だともしていない。確かに、現実には結ばれる人間関係の中で、良好なものとして描かれたものから母-娘関係が突出して例外化されているのは事実だが、こと非現実、あるいは追憶の中に現れる母については、事態は同様ではない。言い換えれば、現実の母-娘関係に理想の形を求めるとに困難はあっても、非現実的状況やすでに失われた母に対する娘の思慕という形であれば、ある種望ましいあり方を想像する余地があったということであろうか。

15) すでに参照したカプランはこの種の母親を「溺愛型母親」と分類し、「愛・育児、合一の欲求を子を回路に充足することが、また自分をも肥やしてくれる」(カプラン、52頁)と述べる。

16) Eliacheff et Heinich, *op.cit.*, p.64.

17) 実際、サンド作品において母-息子関係が息子の十全たる人格を完成させるために、欠くことができない要素として提示されている例は多く見受けられる。

このケースにあたる最も顕著な例は、*Simon*の女性主人公Fiammaとその母親、および*Le Pêché de Monsieur Antoine*の女性主人公Gilberteとその母親の関係に見出すことができる。革命の際、イタリアに亡命を余儀なくされたcomte de Fougèresはその地で結婚して事業を営んでいたが、さらなる富と家名の挽回を目指してフランスに帰国する。彼は娘Fiammaの結婚を、自らの目的遂行のために有効活用しようとするが、彼女はなぜか結婚に対して強い嫌悪を示す。また、主人公Simonに出会い、愛し尊敬される関係を見出したにも関わらず、結婚という交わりには二の足を踏む。その理由は彼女の出生の秘密にあり、Fiammaの母は夫には道具として使われ、愛されることがなかったため、他の男性と関係を持った末に娘を出産したのであった。*Le Pêché de Monsieur Antoine*のGilberteとの共通点はここにある。二人とも、出生にただならぬスキャンダルが潜んでいることが絶え間なくほめかされ、そのどちらもが母親の不倫の末に生まれた娘であることが作品の最後にいたって暴露されるのである。ただ、異なっている決定的な要素があり、それは、Fiammaが血のつながらない父と暮らし、横暴に耐え、達観したような冷たさによってのみ自己を奮い立たせているのに対し、Gilberteは実の父であるMonsieur Antoine、つまり母にとっては不倫の相手と円満な生活を営んでいる点である。従ってGilberteの場合は、自身の出生の秘密を彼女自身が知らされておらず、母の思い出は美しいものとして与えられると同時に、その価値が転換されることは一切ない。一方、Fiammaは自身の出自を知っているのだが、ここで最も重要と思われるのは、彼女がそれをとがめだてする、あるいは恥と感ずることは全くなく、むしろ、非は法律上の父親comte de Fougèresにあると考え、母の名誉の回復を自分自身の使命とさえ感じていることである。

物語が最高潮に達するのはFiammaが自身の出自を知っていることをあかし、comteに向かって彼の妻に対する裏切りと不正を糾弾する場面であるが、そこで彼女はどのように叫ぶ。

La mémoire de ma mère est sacrée pour moi. N'espérez pas la flétrir à mes yeux, ni me faire rougir de devoir le jour à un chef de partisans, à un héros qui est mort pour sa patrie, et dont je suis plus fière que de vos ancêtres, dont une loi absurde et impie me force de porter le nom<sup>18)</sup>.

ここに表明された父に対する嫌悪の情は激烈であるが、この感情の逆りの中に何を読み取るべきであろうか。父の名を名乗ることを強いる法を「absurde et impie」と断じる行為は、父と名と法とが一体となって女性のあり方を規制するシステムそのものへの抵抗と考えられる。また同時に、母の選択と行為を共に正当化することで、この時代に最も重要とされていた血のつながりを基礎として富の拡大的再生産をはかるための法と、その要にあった「父の子であることを証明する母」という妻=母としての使命を蹴散らしていくかのようなのである。Fiammaにと

18) George Sand, *Simon*, Grenoble, Les Editions de l'Aurore, 1991, p.148.

っては血と富とその継承ではなく、母親の思い出だけが「sacrée」なのである。

竹村和子はすでに引用した『愛について』の第三章のタイトルを「あなたを忘れない—性の制度の脱—再生産」とし、「性の制度の再生産の現場であるにもかかわらず、生物学的な命の再生産の場所だと矮小化 / 美化されてきた母—娘関係の考察こそ、現在の性体制の根本的な再考と、その『脱—再生産』にはぜひとも必要なものと思われる<sup>19)</sup>」と述べる。リュース・イリガライもまた『ひとつではない女性の』最終章「わたしたちの唇が語り合うとき」において、現前する実際の母ではなく追憶の母に語りかけけるように母—娘関係の再構築を呼びかける<sup>20)</sup>。サンドが描いたFiammaの姿はまさに、追憶の中の母に対する思慕であり、「あなたを忘れない」というメッセージのように思われる。母と娘のつながりが許されるのは、女性にとって唯ひとつの機能と認められる「夫の子を産む」という行為の継承という形に限られ、産むことによるのみ両者のあり方が好ましいものとされるばかりか、ある種、神話化の方向へと導かれるという現実がある。Simonの中でFiammaは父の道具として使われることを拒否する手段として、結婚の拒絶という方法を採用するように描かれるのは、こうした現実への無意識とも解される反抗であろう。一方、*Le Pêché de Monsieur Antoine*のGilberteの場合には、彼女個人の意志が原因とは言えないが、父Antoineと母の法的配偶者であったcomte de Boiguilbaultが、Gilberteをはさんでお互いに頭をさげるという母の名誉回復をなしにして、彼女の結婚が果たされることはない。いずれの場合も母の名誉回復と正当性の評価は、父たちの価値転換であると同時に、それによって娘たちのアイデンティティが確立される契機ともなるのである。

父—息子関係の陰画として周縁へと押しやられた母—娘関係は、それゆえに別種の豊かさを持ってよみがえる可能性があるだろうか。呼び戻される母というサンドが描いたあり方は、その可能性の一端を感じさせるに充分だろう。材料ともみなされていた女性の身体性は、娘の側からの意識的呼びかけを受けることにより、ただ無批判に流通させられるのではなく、複雑さと不可解さを露呈しつつ主体として立ち上がることになるのではないか。

(奈良女子大学准教授)

19) 竹村和子、前掲書、142ページ。傍点は同書著者による。

20) リュース・イリガライ『ひとつではない女性の』、棚沢直子・小野ゆりこ・中嶋公子訳、勁草書房、1987年（原著は1977年）。